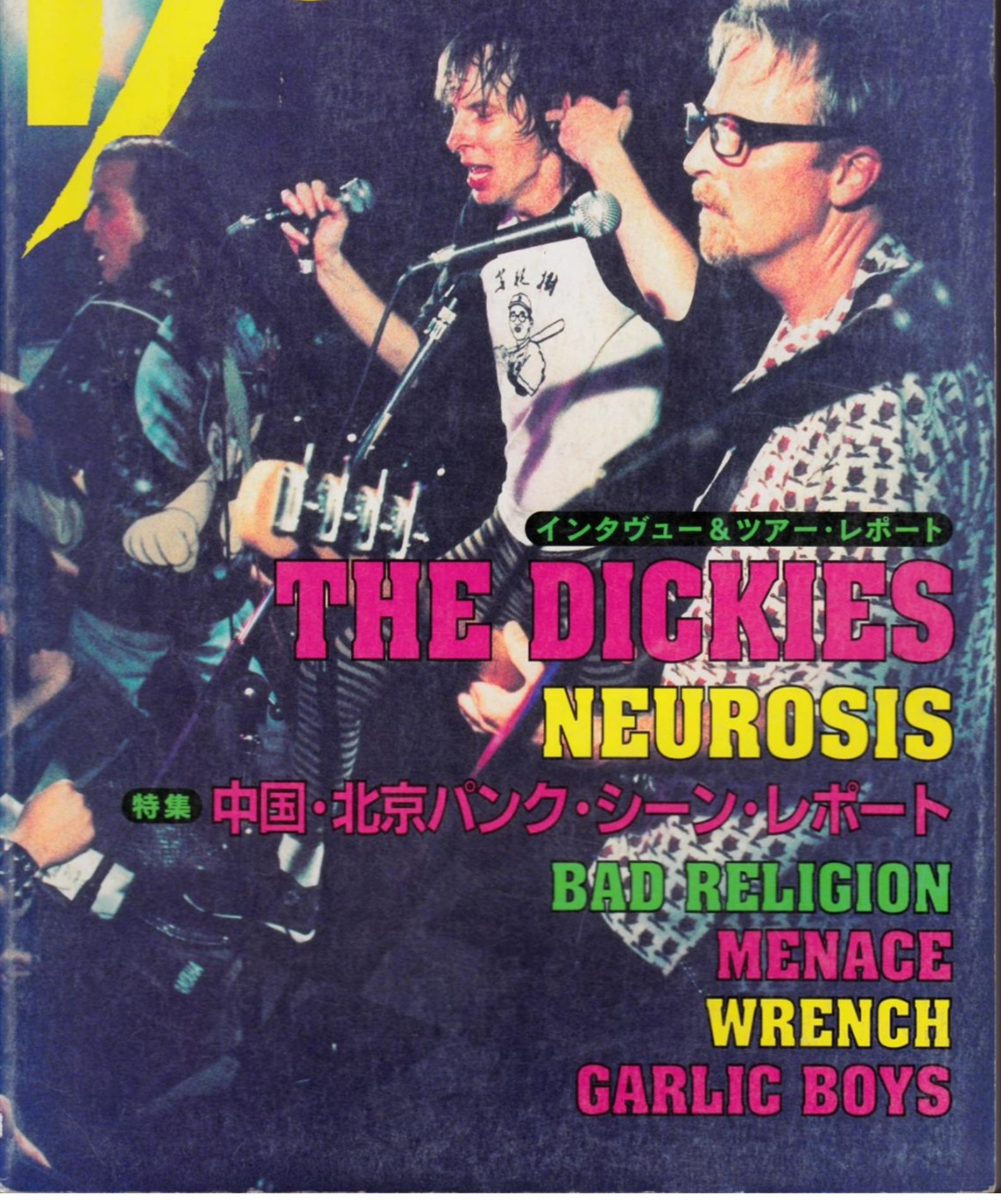


DOLL

7

July 2000
NO.155



インタビュー&ツアー・レポート

THE DICKIES NEUROSIS

特集 中国・北京パンク・シーン・レポート

BAD RELIGION
MENACE
WRENCH
GARLIC BOYS



interview

BAD RELIGION

パンクがひとつのスタイルに固執する必要はないと思う

INTERVIEWED: 石井恵梨子 TRANSLATED: 堀田 宗

バッド・レリジョンの新作『ザ・ニュー・アメリカ』が到着した。ポップの伝道師トッド・ラングレンをプロデューサーに迎えたこのアルバムは、もう西海岸パンクの大御所とか形容するのもどうかと思うくらい、雄大なアメリカン・ロックである。歌って歌って歌い上げているのである。ただし、そこに違和感がまるでなく、むしろナチュラルに聴けてしまうのもまた事実。カントリーやブルースから派生したロックが生み出したパンク・ロックが、20年以上経って増殖し細分化していった歴史は、そのままバッド・レリジョンの歴史と同義なのだ。そう、改めて思う次第。ヴォーカルのグレッグ・グラフィンに話を聞いた。

▶昨年4月の来日時はソング・ライティングに着手していた時期でしたね。あの頃(から)新作のビジョンは決まっていたんですか？

「うん、ディレクションは結構決まっていたし、曲の半分はその時にはできてたな。だからあの時と、そんなには変わってないかな」

▶あの時あなたは「次は最高傑作を作る」と言っていましたけど、このアルバムは発言どおりになったと思いますか？

「いや、あの時はかなりそういう答えを迫られ

てたけど(苦笑)。でも、結果的にいいレコーディングだったと思うし、楽曲にも自信がある。最高かどうかはリスナーの判断に任せるけど、このアルバムを作るにあたって参加してくれた人たちにはすごく感謝してるよ」

▶プロデューサーにトッド・ラングレンを迎えた理由は何かあるんですか？

「主な理由としては、彼は僕にすごく影響を与えてくれた人だからだね。若い頃に初めて買ったのが、彼のアルバムやプロデュースしてる作品だったしずっと昔から彼にプロデュースしてほしかったんだよ。これまでやってもらえるか不安で怖くて言えなかったんだけど、2年前にマネージャーが僕のソロを送ったところ、すごく気に入ってくれて「じゃあ今度バッド・レリジョンをやるのか？」ってことになったんだよ」

▶トッドといえば、優れたポップ・ミュージシャンであると同時に優れたプロデューサーでもありますが、あなた自身は彼に対してどんな認識を持っていますか？

「彼は70年代のポップ・ソングライターだよ。でも、すごくポップな曲を作るにもかかわらず、ニューヨークのアンダーグラウンド・シーンにいた人間なんだ。彼はまだキッズだった僕に、ビッグなロックスターにならずともポップな曲は書けるんだよって事を教えてくれた。だから、彼は僕のソングライターとしてのモデルになってるんだよ。彼のアーティストとしてのスタイルにもずっと憧れてたからね」

▶具体的に影響を受けた作品はありますか？

「もちろんニューヨーク・ドールズ、バティ・スミス、XTCとか、彼のプロデュース作品も当然好きだけどね。でも、彼の74年(正確には73年)のアルバム「(ア・ウィザード・ア)トゥルー・スター」ほど影響を受けたものはないな。あれは今までに僕が聴いた作品の中で一番バンクしてるよ」

▶プロデューサーとしての彼は、自分のやりたいようにしかやらない非常にワガママなタイプだという逸話もありますけど。

「あは(笑)。彼にプロデュースして欲しくない後向きな連中が勝手にそう言ってるんだよ。僕たちは彼にプロデュースしてもらるのがすごく光栄だったから、非常に前向きだった。問題なかったよ。それに僕は言いたいことはガツンと言うし、隠すのも嫌だからね。彼も僕と同じタイプなんで、すぐに打ち解けられたよ」

▶なるほど。で、新作はこれまで以上にミッド・テンポの曲が増え、歌にかなりの重点を置いているようです。これはトッドの参加がもたらしたもので、それとも意識的にこういう曲を増やしたんでしょうか？

「そうだね。僕らは今までいっぱい速い曲やビートの強いものをやってきたけど、今回はもっと初期に近いバンクにしたかったんだ」

▶初期バンク、と、いいますと？

「僕らがこのバンドを始めた当時のバンクはテンポに重心を置いてなかったし、ポップだった。それに今でも売れる初期バンク、たとえばクラッシュやシャム69、スティッフ・リトル・フィンガーズあたりは、今の僕らがやっている音楽よりもずいぶんスローだよ。そういうバンドに僕は影響されたし、バンクの定義みたいなものを見いだしてきたん

だ。それに当然だけど、バンクはテンポの速じゃないからね」

▶スピードや勢いに頼らず、音の重みや厚みによってパワフルな作品を作り上げたかったということですか？

「うん、そのへんは意識してやったことだよ。そういう作品にしたかったからね」

▶バッド・レリジョンは“テンポが速くてメロディアス”というひとつのスタイルを確立したバンドですけど、その文脈だけで見られるのはイヤだとか？

「んー、君が言ったとおりで、僕らがこのシーンを確立したバンドのひとつであることは自覚してる。多くの人にとっては“テンポが速くてメロディアス=バッド・レリジョン”って図式ができてるんだろうし、それに対しての誇りも持ってるよ。だから、それを捨てるような事はしないけど…。でも、もっといろんなことをやってバンドの幅を広げて、違うスタイルを開拓出来ればいいなとも思うんだ。とりあえず今のところは僕らのコンサートをみれば、“テンポが速くてメロディアスな曲”と“分厚くてパワフルな曲”の両方が聴けるってことだよ」

▶失礼な言い方ですけど、勢いのあるファストな曲調ばかりで攻めることは年齢的/体力的にきびしくなっている、なんてことは？

「……v/v/v/v(笑)」

▶す、すいません(苦笑)。

「いや、いいよ……でも僕はまだ35歳なんだけど(笑)。実際はスローな曲の方がツライんだよ。ヴォーカリストとしても、長い音符を歌うよりは速いほうが楽だし。まあドラマティックにはツライのかもしれないけど、うちのドラムは世界一だから問題はないと思うよ」



▶あと、「Whisper in Time」や「There Will Be a Way」などの曲からは、伝統的なアメリカン・ロック、そしてカントリー/フォーク・ロックにも近い雰囲気を感じますけど。

「そういうカントリー・フォークの類いはいつも好きで弾いてるし、僕が98年に出したソロでもやってるんだ。あのスタイルをバッド・レリジョンに入れることに抵抗はなかったよ。メンバーも賛成だったし」

▶でもなんでまた、カントリーのスタイルをバンドに取り入れようとしたんです？

「バンクがひとつのスタイルに固執する必要はないと思うからね。バッド・レリジョンの客はバンクスだけど、バンクスだからっていつもバンクが欲しいわけじゃないと思う。僕らのライヴはバンクの祭典みたいなものだから、何でもありでいいんじゃないかな。それ

に、1枚のレコードの中に色々なスタイルが混ざってる方が好きなんだ。初期バンク・シーンはちょうどそんな感じだった。僕らが若い頃クラブに行くところ、いろんなバンク・シーンのバンドがブレインして、ロカッパのからエレクトロニック系まで、びっくりするぐらいごちゃ混ぜだったよ。今みたいにみんなただ速いだけじゃなくて。で、今回の僕らは、当時のバンク・シーンをひとつのバンドで表現したいと思ったんだよ」

▶マイク・ネスカ「17歳の時はバンク・ロッカーでいたかったけど、今の俺はアメリカン・シンガー・ソングライターだ」と発言してるんですけど、この意見には共感できますか？

「いや俺はまだバンクだ(笑)俺はバンク・ソング・ライターだ(笑)」

▶じゃあ、本作も当然バンク・ロックなアルバムだと。

「このアルバムの何がバンクかって言うなら、このアルバムを作ったバッド・レリジョンがバンクなんだよ。もちろん、歌詞の中には社会に向けての反発とか、わりと初期バンクに近いことを書いてるし」

▶なるほど。ちなみに、アルバム・タイトルでありシングル曲となる「ザ・ニュー・アメリカ」の意味は？

「いや、ちゃんとした意味はないんだけどね。“ニュー・アメリカ”っていうのは、これからの新しいミレニアムの中で僕らアメリカ人が探さなきゃいけない物なんだ。ただでさえ最近経済は狂ってるし……。僕らがこの先ちゃんと判断しなきゃいけないんだ。僕はアメリカ人だし、ここが僕のホームだ。アメリカに限らず、もし自分のホームを良い方向に持っていきたいと思うんだら、自分の国を問いたすことだね」

▶わかりました。で、このアルバムは通算10枚目となるわけですが、2桁を超えるアルバム枚数をリリースできるバンドってそんなに多くないですよ。この事実を振り返ってみて、どんな気持ちですか？

「すごく誇りに思ってるよ。バンドを褒めてあげたいと思う。誰にでもできることじゃないからね。それにまだまだ活動は続いている。これからも頑張っていくよ」

▶よく“年月を経るうちに、このメンバーでやるべきことはなくなった”と解散してしまう例もあるんですけど、あなたたちにそういう危機感が訪れたことは？

「ないね」

▶でも、考え方や生き方はずいぶん変わったんじゃないですか？20年前と比べたら社会や環境も違うわけですし。

「そうだね。っていうか、変わらない方がおかしいでしょ(笑)。当時に比べたら今はすべてにおいて良くなってるからね。技術的にも精神的にも成長してるし。でも、バンク・スピリットっていう視点から見ると……。そうだな、最近、Bad Religion.com(公式ウェブサイト)でバンクについての記事を書いたから、それを見てよ」

▶じゃあ最後の質問ですけど、あなたが音楽をやるうえで、最も大切にしていることは何だと言えますか？

「フリーダムだね。そしてバッド・レリジョンは、僕に自由を与えてくれるプラットホームなわけだよ」